

Ⅲ 遺物

1 土器

右京一条一坊西北坪の東南部に位置する第81次調査で出土した土器は総量で整理箱16箱程度と少ない。大半が飛鳥Ⅳ～Ⅴの藤原宮期前後の井戸・土坑などから出土した土師器・須恵器で、他に斜行溝 SD8655出土の弥生時代後期の土器、楕円形土坑 SK8667出土の13世紀前半の土師器・瓦器・白色釉陶碗、小溝群等出土の黒色土器・瓦器などが少量ある。ここでは、藤原宮期前後の遺構出土土器を報告し、併せて同じ西北坪内の第60次調査の井戸および一条条間路側溝、西南坪内の第65次調査の井戸・土坑出土土器を概述することとし、弥生土器、平安時代以降の土器等については割愛する。なお、土器の時期区分、器種名、調整手法名などは『飛鳥藤原宮発掘調査報告Ⅱ』、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』などに準拠し、適宜追加する。

1) 井戸 SE8690出土土器 (fig. 7 - 1 ~ 30, PL. 8, 10) 整理箱 4 箱。すべて井戸枠採取穴出土。大半が藤原宮期の土師器・須恵器で、奈良時代前半の土器がわずかに含まれる。埋土は上下 2 層に分かれるが、土器の内容は明確には分れない。

土師器 器種には杯 A、杯 B、杯 C、杯 G、杯 H、皿 A、蓋、鉢 A、高杯 A、横瓶形小壺、小壺 B、甕 A、甕 B、甕 C、鍋、甌があり、製塩土器片が 1 片ある。杯 A (13・14) は底部外面をヘラ削りし、口縁部外面を粗くヘラ磨きする b_1 手法で、内面は底部にラセン暗文、口縁部に 2 段の放射暗文を施す。13の底部外面に×の針描きがある。他に奈良時代に降る 1 段放射暗文の破片があるが図示できない。杯 C (9~12) は底部のヘラ削りと口縁部外面のヘラ磨きを省略した a_0 手法。口径 15.8cm の C II (12) と口径 13~14cm の C III (9~11) がある。10・11は口縁端部の外側が沈線状にへこむのと内面を黒色処理している点で特異である。大型の杯 (15) は b_1 手法で左傾する放射暗文を口縁部まで施す。分厚い底と砂を多く含む胎土が通有の杯 C と異なる。口径 19.2cm、器高 3.6cm、径高指数 20.3。皿 A には、 a_0 手法で 1 段放射暗文をもつ (17) と、底部外面を粗く削った後に外面全面をヘラ磨きする b_3 手法で、内面底部をハケメ調整の後、三重のラセン暗文を施す (18) がある。18は内湾気味の口縁部、石英粒を多く含む胎土が異例である。底部外面に「×」の墨書がある。蓋 (16) は大きく扁平なつまみをもち、口縁端部がわずかに肥厚する。頂部は 5 分割にヘラ磨きし、内面とつまみ上面とにラセン暗文を施す。口径 21.4cm。口縁部をヨコナデするだけの杯 G (2・3) は口径 10~11cm。3には灯明痕跡がある。暗茶灰色を呈し粗製である点で皿 G (1)、小壺 B (4~6)、横瓶形小型壺 (7) と共通する。小壺 B は扁平な体部に外反する短い口縁がつく。口径 6~9cm 前後の小型品である。4・5 は外面をハケメ調整し、内面はナデ調整。6 は体部外面をナデ調整、内面をヘラで撫でる。横瓶形小型壺は 4・5 と同じ調整で内面には粘土の継ぎ目が残る。体部長

8.8cm。製塩土器（8）は口径9cmで外面に手掌紋が残る。甕・鍋は多量にある。小片のため図示できないが甕Aには体部内面をナデ調整する「大和型」に混じって、体部内面をヘラ削りする「河内型」などがある。

須恵器 器種には杯A、杯B、蓋、椀A、鉢、高杯、平瓶、壺、甕などがある。杯Aには法量の違いによるAⅢ₁とAⅣがある。AⅢ₁（27）は丸底気味で厚い底部の外面を丁寧にロクロ削りする。口径14.6cm、器高5.5cm。AⅣ（28）は底部ヘラ切り不調整。杯Bには法量による

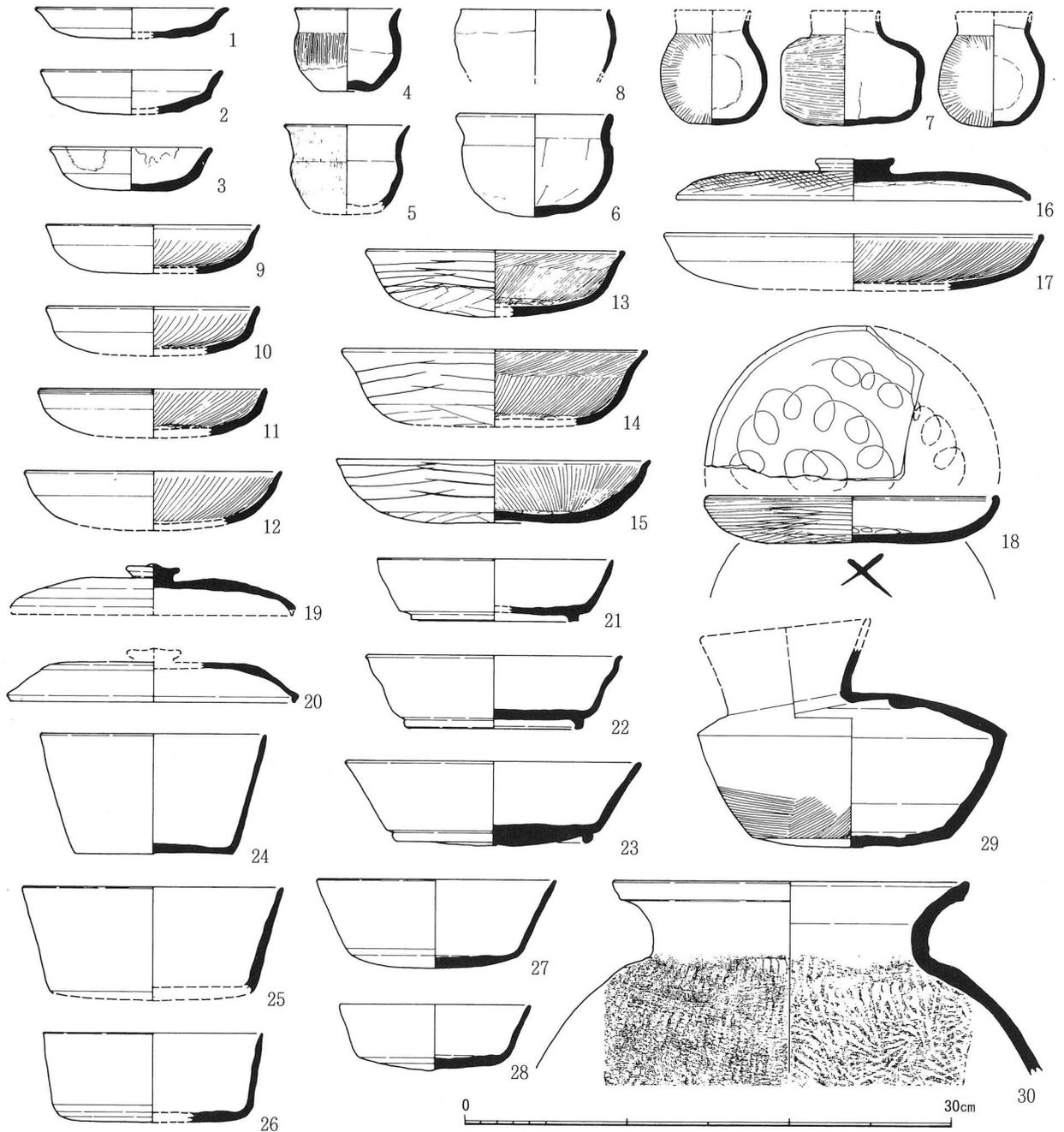


fig. 7 SE 8690出土土器

BⅡ、BⅢ、BⅣがあり底部へラ切り不調整が多い。BⅣ(21)は口径14.5cm、器高3.9cmで低目の高台がつく。杯BⅡ₂(23)は分厚い底部が高台より下に垂れる。硬質で灰白色、東海地方の製品。なお、BⅢに灯明痕が残るものがある。杯B蓋(19・20)は扁平な宝珠形のつまみがつき身受けのかえりはない。ともに内面を硯に転用する。なお、かえりをもつ蓋は下層出土の1点のみである。椀Aには平底から直立気味に開く24と、丸みをもって口縁部に至る25・26がある。24の口径13.8cm、器高7.4cm。平瓶(29)は肩部に稜のつくやや高い体部と広口の口縁部からなる。体部外面下半を粗くハケメ調整したのち底部周縁部をへラ削りする。体部径19cm。甕(30)は直立気味に開く短い口縁の端部が三角形に肥厚する。内面の当て具は年輪の浮き出た木口に放射状に刻み目を入れた「車輪文」である。白灰色で砂を多く含む。甕には他に直立する短い口縁部をもち肩部に円形浮文を貼り付けたものなどがある。

2) 井戸 SE8689出土土器 (fig. 8-31~42, PL. 8, 10) 整理箱1箱。方形縦板組の井戸枠内から土師器杯A、杯B、杯D、蓋、高杯A、壺、甕A、須恵器杯A、杯B、同蓋、平瓶、横瓶、壺、甕Aが出土。大半は藤原宮期に属すが、埋土上層に33・39など奈良時代中頃に降るものが少量含まれる。掘形出土土器には土師器杯A、甕、須恵器杯A、鉢Aなどがあり、須恵器杯A(40)や土師器杯A片は藤原宮期に属す。

土師器杯AⅠにはb₁手法で口縁端部の肥厚が小さい31や大きく巻き込むように肥厚する32などがある。31は口径18.4cm、器高4.8cm、径高指数27前後。32は口径19.4cmで共に藤原宮期に属すが、31が古い様相をもつ。33は口縁部内面に1段放射暗文と連弧暗文を施し、口径20cmで平城宮Ⅱ期に属す。甕A(34)は内湾気味の口縁の上端に面をもつ。体部内面下半はオサエ、上半はナデ調整。外面全体に煤が付着する。甕A(35)は「河内型」であるが内面下半部をナデ調整する。口径17.8cm、器高18.0cm。須恵器杯Aには口縁部と底部の境に丸みのある杯A(36)と、角張った杯AⅡ(37)があり、ともに底部はロクロ削り。杯BⅣ(39)は低い高台が底部の縁辺につき、口縁部が斜め上方に直線的に開く。口径13.2cm、器高4.1cmで底部はへラ切り不調整。平城宮Ⅲ~Ⅳ期に属す。杯B蓋(38)は口径16.5cm。やや高い宝珠形のつまみの上面に「×」の墨書がある。横瓶(41)は成形時の下半部は平行叩き目と同心円当て具痕からなる叩き成形であるが、上半部は叩いていない。甕A(42)は口径16.8cmの直立気味の短い口縁をもつ。底部外面と口縁部~頸部の内面が磨滅している。体部径27.3cm、器高28.9cm。

3) 井戸 SE8650出土土器 (fig. 8-43~51, PL. 9, 10) 井戸枠抜取穴からの出土で整理箱1箱。器種には土師器杯A、杯C、杯H、皿A、甕A、甕B、須恵器杯A、杯B、同蓋、平瓶、横瓶、壺、甕などがあり、土師器鍋・甕類、須恵器壺・甕類が多い。いずれも藤原宮期に属す。

土師器杯AⅠ(45)はb₁手法で比較的密な2段放射暗文。口径17.0cm、器高5.0cm、径高指数29.4。杯CⅡ(43・44)は口径13.6cm、器高2.9cm。甕A(46)は口縁端部外側に面をもち、体部下半内面を縦ハケメ、上半から口縁部を横ハケメ調整。口径16cm。甕A(47)は茶褐色の

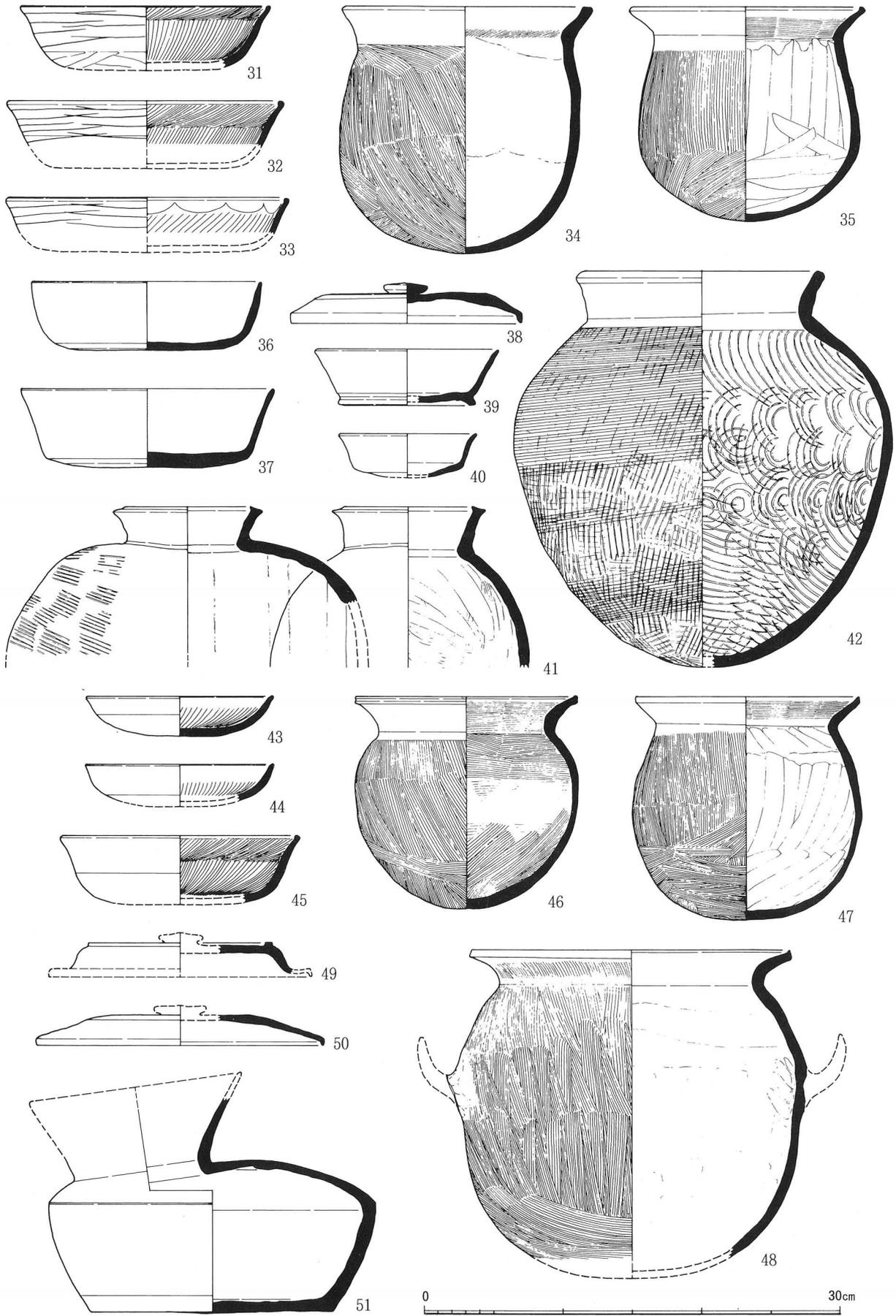


fig. 8 SE 8689 • 8650出土土器

緻密な胎土で体部内面をへら削りする「河内型」。口径16.0cm、器高16.3cm。甕B（48）は体部内面上半を横に、下半を縦にナデ調整するが、所々に成形時の当て具痕跡が残る。口径23cm。須恵器杯B蓋（49）は頂部の周縁に高台状の突帯が巡る。器形から体部に稜をもつ杯類の蓋と思われる。類例は陶邑古窯址群のTG33・55・71号窯などにあり、藤原宮期前後の土器と伴出するが、本例は外面の濃緑色の自然釉や胎土からみて陶邑古窯址群の製品ではない。平瓶（51）は丸みのある頂部に広い口が開く。底径17.5cm、体部径23.6cm。

4) 井戸 SE8664・8665出土土器 (fig.9-52~66、PL.9, 11) 2基の井戸は検出当初、1基の不整形な土坑と認識しており、その段階で出土した遺物には和同開珎銅銭1枚と土師器杯A、杯C、皿A、蓋、鉢、甕、須恵器杯A、杯B、同蓋、高杯、壺、甕等がある。掘り進める内にSE8665の井戸枠を抜き取った後、SE8664が構築されており、検出当初の土器にはSE8664廃絶時までの土器が混在することが判明した。和同開珎の出土位置はSE8665井戸枠抜き取り、SE8664掘形のいずれかであるが、両者の土器は互いに類似している上、比較的良好な接合関係にあって区別できない。そこで、土坑段階の土器とSE8665抜き取穴及びSE8664掘形の土器、SE8664井戸枠内の土器とに分けて記述する。

土坑段階の土師器杯CⅡ（64）は口径13.6cm、器高3.3cm、径高指数24。口縁端部内側の面が広い。飛鳥Ⅳ～Ⅴ期。須恵器杯BⅡ（66）は分厚く垂れ下がった底部をもち、口径17.0cm、器高3.2cm。飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に属す。これに対して須恵器杯BⅢ（65）はへら切り調整の底部と直線的に開く口縁部との境に低い高台を巡らせる。SE8689の39と類似し平城宮Ⅲ期に位置づけられる。口径15.2cm、高さ4.5cm。65は出土土器の中で最新の資料であり、SE8664の廃絶を平城宮Ⅲ期におくべきことを示している。

SE8665抜き取り及びSE8664掘形出土土器（52～55・62）には土師器杯A、杯C、杯H、皿A、蓋、高杯、鉢、甕A、甕B、須恵器杯A・椀A・杯B・同蓋・高杯、甕などがあり、いずれも飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に属す。土師器杯AⅠ（52・53）はb₁手法で、口縁端部を小さく肥厚させ、2段放射暗文を施す。口縁部が直立気味の52は暗文が粗く、外傾度の大きい53は密な暗文である。口径18～18.5cm、器高5cm前後。径高指数27～28.5。皿AⅠ（54）はb₀手法で口縁端部を小さく外反させる。口径22cm。甕A（55）は湾曲する口縁部の内面をハケメ調整し、外端部に面をもつ。体部内面は横方向のナデ調整。口径16cm。須恵器杯BⅡ（62）はSE8664掘形出土で外方に踏ん張った細い高台と口縁端部の小さな肥厚が特徴的。東海地方の製品であろう。ロクロ削りの底部外面に「川」字状のへら記号がある。口径17.8cm、器高4.3cm。

SE8664井戸枠内出土土器（56～61）は大半が最下層からの出土で、器種には土師器杯D、杯H、皿A、壺、甕A、甕C、須恵器杯A、杯B、同蓋、平瓶、壺、甕などがある。土師器甕体部や須恵器壺口縁部の細片が多い点でSE8685と類似する。土師器杯D（56）は内湾気味の口縁の端部が内側に肥厚する。b₁手法で内面に暗文をもたない。口縁部の内外面に「×」の

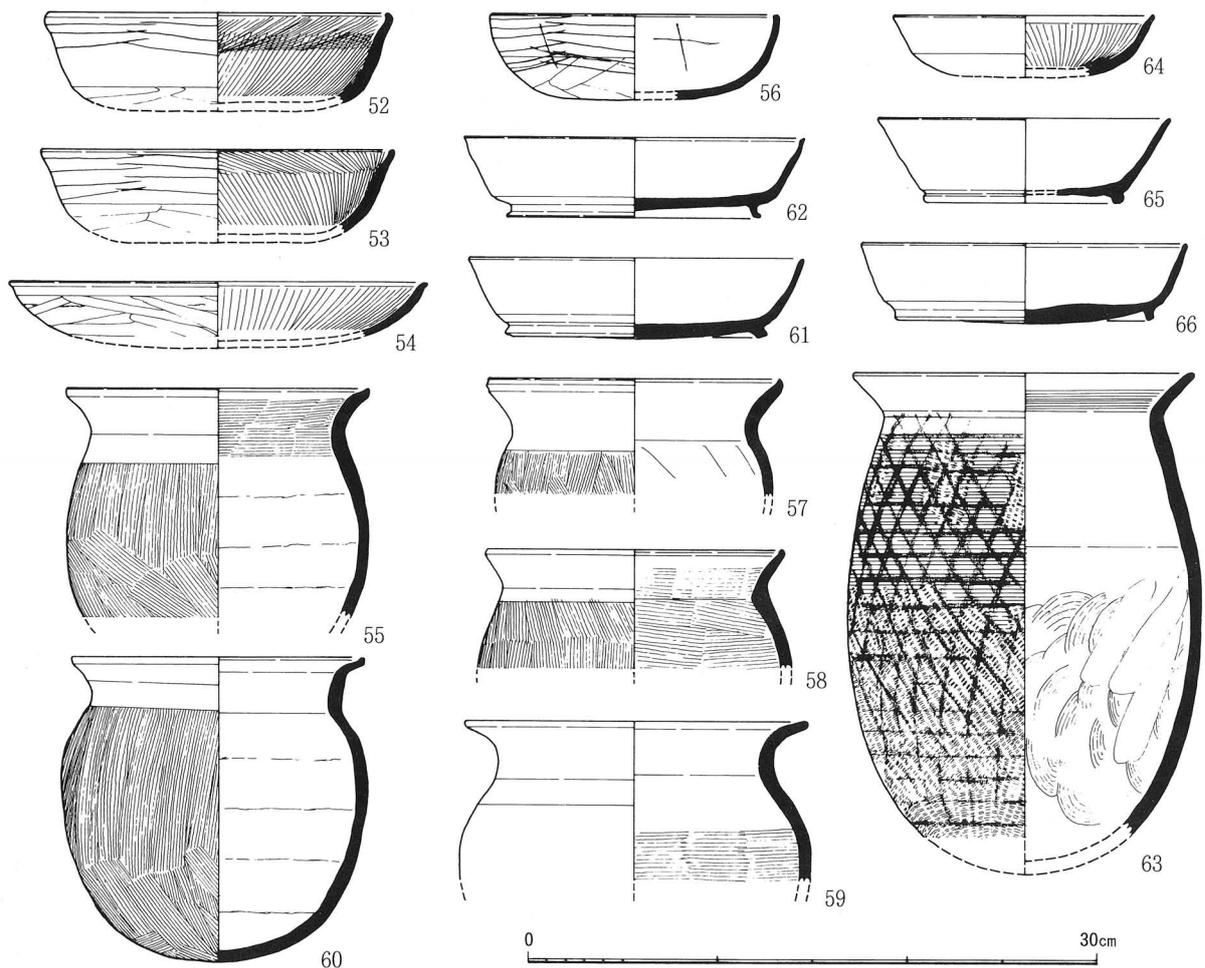


fig. 9 SE 8664・8665出土土器

針書きがある。口径15.0cm、器高4.5cm。甕A（57～60）はほぼ同大であるが、内面をへらで横方向に撫でる57、横方向ハケメ調整の58・59、横方向に撫でる60などがあり、口縁部の形態も多様である。58は胎土と口縁部の特徴からも「近江型」。「大和型」の60の体部外面には全体に煤が付着し、内面には一方に偏った焦げ付きがある。甕C（63）は須恵器の技法で作ったいわゆるロクロ土師器甕で、体部全体を叩き成形した後、上半部外面をカキメ、内面をナデ調整する。体部内面下半には微かな同心円の当て具痕が残る。淡黄灰色を呈する還元炎焼成で軟質。北陸地域に顕著な分布を示す器種であるが、藤原宮・京域の飛鳥Vの土器群に2・3の出土例がある。頸部以下の体部外面に幅3mmの植物質を粗く編んだ籠の痕跡が残る、釣り下げて使用したとみられる。須恵器杯B（61）は厚い底部に比べて細い口縁部からなる。底部外面はロクロ削りののちロクロナデ。口径17.5cm、器高4.2cm。

5) 井戸 SE8685出土土器 (fig.10-67~74、PL.10) 整理箱半量。大半が井戸抜取穴出土で、器種には土師器杯A、杯C、壺B、甕、須恵器杯A、杯B蓋、壺、甕がある。土師器杯Aには時期を異にする三者がある。内面に2段放射暗文を施す69は飛鳥IV~V期。1段放射暗文と連

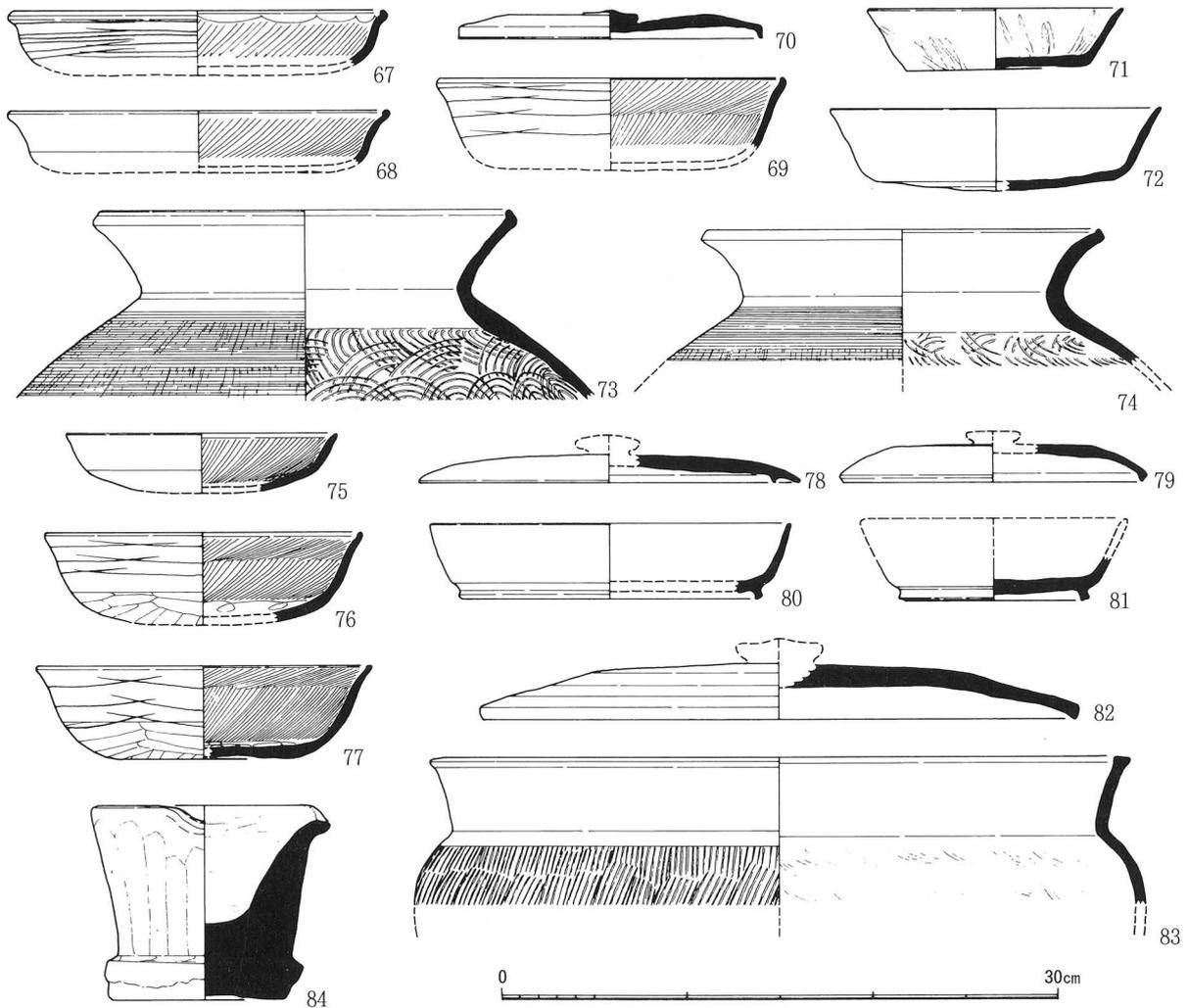


fig.10 SE 8685・SK 8686・SB 8670出土土器

弧暗文を施す67は口径20cmで平城宮Ⅱ期。1段暗文で外面のヘラ磨きがない68は同Ⅲ期。抜取穴最上層の須恵器杯A（71）は平底から斜め上を開く器形で底部はヘラキリ未調整。内外面に火禿きがある。平城宮Ⅲ期。なお一部残った掘形埋土には飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に属す土師器杯A等が数片含まれている。

6）土坑 SK8686出土土器（fig.10-75～83） 整理箱1箱。器種には土師器杯A、杯C、杯D、杯G、杯H、皿A、甕、甑、須恵器杯A、杯B（81）、同蓋、椀B、皿B、同蓋（82）、高杯、鉢、甕などがあり、供膳具が目立つ。土師器杯Cには口径14.6cm、器高3.2cm、径高指数22で飛鳥Ⅳ～Ⅴ期に属すCⅡ（75）のほか、径高指数28～32で外面を磨く飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に属すものがある。杯A（76・77）はともにb₁手法でヘラ磨きが粗い。須恵器蓋には杯BⅠ蓋（78）のようにかえりをもつものが少量含まれるが、大半はBⅢ蓋（79）のようにかえりをもたない。蓋（82）は口径31cmで大型の皿Bに伴うもの。甕（83）は端部の肥厚した大きな直口。外面は平行叩き目、内面はナデ調整で平滑。

7) 建物 SB8670出土土器 (fig.10-84) 柱穴から飛鳥IV~V期の土師器杯A、杯B、杯C、皿Aなどの小片とともに、瓦を思わせる胎土と焼成の播り鉢(84)が出土した。厚い器壁の平らな底部と斜め外方に直線的に開く口縁部からなり、片口につくる。外面は口縁部を縦方向に、底部との境を横方向にへら削りする。内面には使用時の擦痕が横方向に残る。

8) 一条条間路(SF6800)側溝出土土器 (fig.11-85~101) 整理箱4箱。北側溝SD6802出土土器が南側溝SD6801出土土器よりも多い。器種には土師器杯A、杯C、杯B、杯G、皿A、高杯B、小壺B、甕A、甕B、甕C、鍋、甗、竈、須恵器杯A(99)、杯B(94・95・101)、同蓋(91~93)、杯G、椀A、椀B(97)、皿A(100)、鉢A、大盤A、短頸壺、提瓶、長頸壺、平瓶、甗、甕などがある。いずれも飛鳥IV~V期に属し奈良時代の土器は明確ではない。

土師器杯A I(85)はb₁手法で口径18.6cm。皿A(86)はa₀手法で口径22.6cm、器高2.6cm。小壺B(87・88)は口径6.8~7.2cm、器高4.6~5.2cm。完形品。甕A(89)は内面をへら削り、外面を細かなハケメ調整する「河内型」。短い口縁の甕X(90)は体部内面粘土の継ぎ目が残る。竈は裁頭円錐形をなす体部の一側面を方形に切取り、その両側と上部に庇を貼り付ける。口径20cm、高さ20cmの小型品と口径25cm以上、高さ約40cmの大型品がある。須恵器蓋(91)は頂部外面に「□〔郡カ〕□」の墨書を持ち、92は内面を硯に転用している。杯B(94・95)は底部へら切りで踏ん張り気味の高台をもつ。杯G(98)は底部へら切り。杯A(99)は底部ロクロ削りで無蓋の器種。口径15.2cm、器高4.2cm。椀A(96)は直立する口縁部の端部外面が凹む特徴を持ち、猿投窯の製品と思われる。口径13.4cm、器高6.4cmで有蓋の器種。杯B(101)は白灰色で薄手。口径27.6cm。杯部下半をロクロ削りし、径17cmの高い高台がつく。

9) 井戸 SE6810出土土器 (fig.11-102~107) 整理箱1箱。一条条間路北側溝に近接した井戸の抜取穴。器種には土師器杯A、杯D、杯G、皿A、鉢A、小壺B、甕A、甕B、甗、須恵器杯A、杯B、同蓋、壺、甕があり、いずれも藤原宮期に属す。杯D(102)はb₁手法だが底中央部に木葉痕が残る。杯G(103)も同様の器形であるがa₀手法。皿A(104)はa₀手法で86と類似し、後述の120(b₀手法)よりも浅い。皿A、杯Gともに底部に木葉痕が残る。甕A(105)はSE8664の60に類似した口縁だが内面はハケメ調整。口径13.6cm、器高11.3cm。須恵器杯B(107)は垂れ下がる底部の周縁に低い高台がつく。口径16.6cm、器高4.6cm。蓋(106)は外径15.9cm。口縁端部内面に灯明痕がある。

10) 井戸 SE7244出土土器 (fig.11-108~116) 整理箱2箱。右京一条一坊西南坪北端の井戸で、北半を逆L字形の縦板組に改修する。器種には土師器杯A、杯B、蓋、杯C、皿A、高杯A、鍋、甕A、B、竈、甗、須恵器杯A、杯B、蓋、皿、椀A、壺、甕がある。土師器では杯A・Bが多く、鍋、甕、甗、竈などの存在も特徴的である。杯Aにはb₁手法で2段放射暗文(109)のほか、平城宮II期に属す1段放射暗文+連弧暗文(108・110)が少量ある。杯B(112・113)は径高指数28前後で外面を密に磨く。蓋(111)は口径15.8cm。内面に大きなラセ

ン暗文を施す。須恵器蓋（114）は厚い頂部と薄い端部が特徴的で、奈良時代に降る可能性が強い。杯A（115）は口径16.4cm、器高4.0cm。口縁の上 $\frac{1}{3}$ の内外面に灰が被り、同一器種の重ね焼きである。杯B I（116）は薄手でシャープな口縁部。東海地方の製品。井戸は平城遷都前後に改修され、奈良時代前半に廃絶したと思われる。ほかに土馬・転用硯・埴埴に使用した土師器などがある。

11) 土坑 SK7236出土土器 (fig.11-117~121) 5袋。器種には土師器杯A、杯C、杯G、皿A、甕A、甕B、甕C、須恵器杯A、杯B、蓋、鉢A、甕がある。藤原宮廃絶時~奈良時代初めに属す。杯A I（118）はb₁手法で2段放射暗文。口径20cm余。杯A II（117）はa₁手法で口径11.4cm。杯C（119）は藤原宮期の特徴をよく示す。皿A（120）はb₀手法で104よりも浅いが放射暗文は粗い。土師器甕Aは口径16cm、器高14cm前後で内面をなでる「大和型」が多く、口縁部が大きく肥厚する。須恵器鉢A（121）は端部近くを強く撫でる特徴がある。灰白色を呈する東海地方の製品。

12) 土坑 SK7240出土土器 (fig.11-122~128) 5袋。浅い皿状の方形土坑で、他の土坑・井戸と異なり、飛鳥Ⅲ~Ⅳの土器が主体で、飛鳥Ⅴがわずかに含まれる。器種には土師器杯A、杯C（123）、杯H（122）、皿A（125）、皿H（124）、鉢A、台付鉢、高杯B、高杯H、甕A、甕B、甕C、甕X、竈、須恵器杯A、杯B、杯G（127・128）、蓋（126）、壺、甕がある。土師器杯A、須恵器杯Bは少なく、他に漆皿に使った土師器杯やフイゴ羽口、鋳型がある。工房に関連した土器群であろう。

13) 土坑 SK7238出土土器 (fig.11-129~130) 2袋。土師器杯A、甕A、甕B、小壺B、須恵器杯B、椀Bがあり、藤原宮期に属す。土師器杯A（129）はb₁手法で2段放射暗文だが径高指数23と浅い。椀B（130）は口径20.8cm。底部は丁寧なロクロ削り。高く踏ん張る高台がつく。底部外面にヘラ書き「□〔部カ〕」がある。東海地方の製品であろう。

14) 井戸 SE7243出土土器 (fig.12-131~148) 整理箱5箱。多くは飛鳥Ⅴ期に属すが埋土上半部に平城宮Ⅱ期に属すものがある。器種には杯A、杯C、杯B、蓋、皿A、皿H、高杯A、鉢A、甕A・B・C、鍋、竈、須恵器杯A、杯B、蓋、椀A・B、皿B、鉢A、高杯、平瓶、甕などがあり、墨書土器、土馬、フイゴ羽口が伴出する。土師器杯Aには藤原宮期に属す136のほか、平城宮Ⅱ期に属す連弧暗文をもつ小片がある。杯（131）はb₀手法で杯A Iに似た法量もち、132はa₀手法で杯Cに似た器形であるが、いずれも内面に暗文を施さない。杯A、杯Cを模倣した粗製の杯で藤原宮東内濠SD2300などに出土例がある。蓋（134）は口径23.2cm。皿Bに被る。皿A（135）はa₀手法で、口縁端部の巻き込みが大きい。平城宮Ⅱ期。鉢A（137）は口縁部内面に長い1段放射暗文、底部をハケメ調整した後にラセン暗文を施し、口縁部外面を密に磨く。甕A（138）、甕C（139）はともに体部内面をヘラでなでる。須恵器杯A（145）は浅手で底部ヘラ切り不調整。杯B（143・144）は底部の内寄りに踏ん張った高台を付けたもの

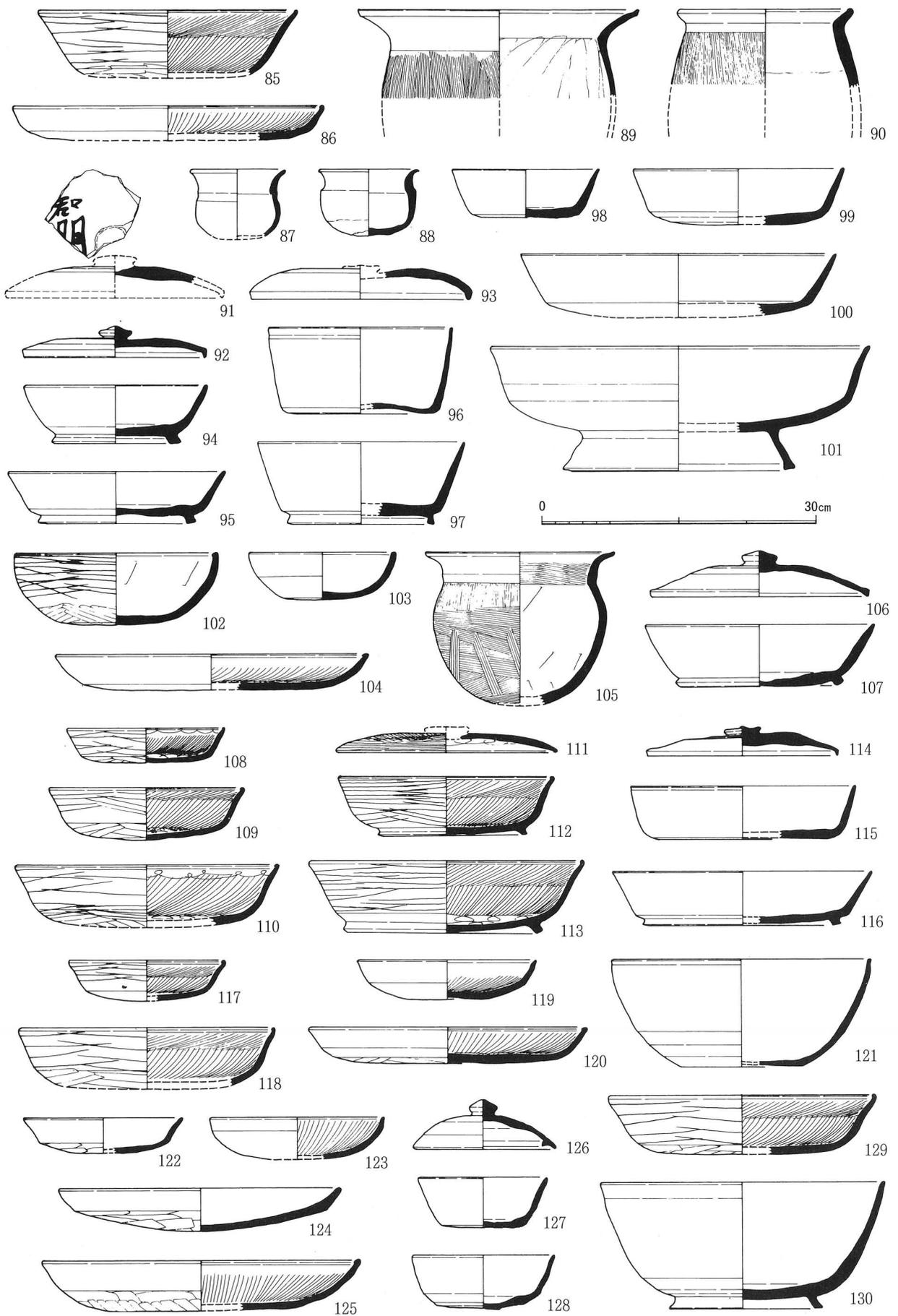


fig.11 SD 6801 • 6802 • SE 6810 • SE 7244 • SK 7236 • SE 7240 • SK 7238出土土器

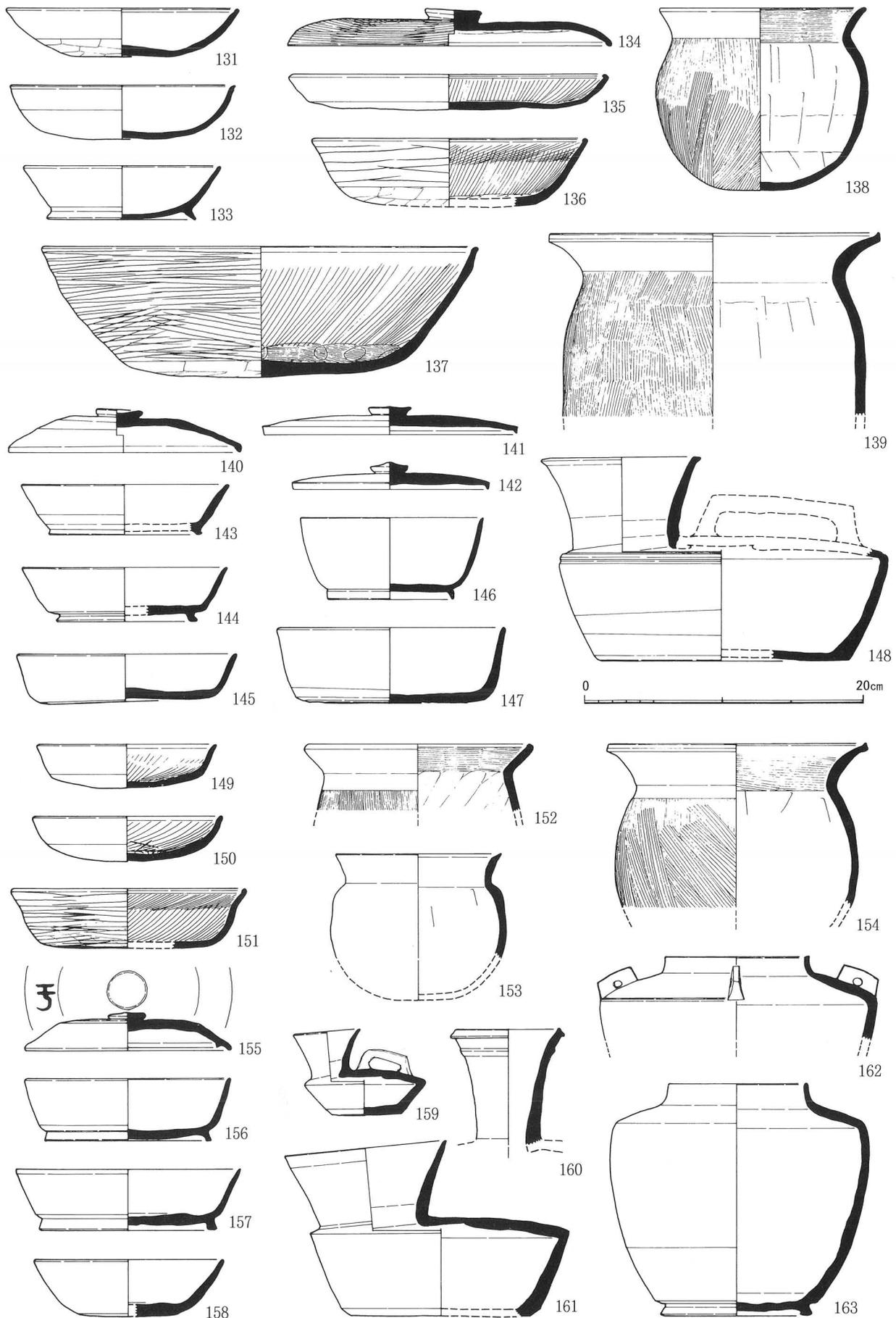


fig.12 SE 7243 · 7237出土土器

(144) が一般的であるが、底部の周縁に低い高台を付けたもの (143) が少量ある。椀B (146) は直立気味の口縁部で、高台は断面三角形を呈する。胎土からも東海地方の製品。蓋には笠形 (140) と扁平 (141・142) の二者があるが、かえりをもつものはほとんどない。平瓶 (148) は体部径23.6cmの大型で肩部に二条の沈線が巡る。扁平な頂部に上側面をヘラ削りで調整した提梁がつく。平城宮Ⅱ期に属すであろう。

15) 井戸 SE7237出土土器 (fig.12-149~163) 整理箱 7箱。大半は飛鳥Ⅳ~Ⅴ期に属すが一部 (159・162等) は奈良時代初めに降る可能性がある。器種には土師器杯A・B・C・D・G・H、蓋、皿A、鉢A、小壺B、甕A・B・C、鍋、甌、竈、須恵器杯A・B・G、蓋、椀A、鉢A、皿A・B、大皿、台付壺、平瓶、長頸壺、短頸壺、搦り鉢、甕がある。他に墨書土器、転用硯、漆皿、製塩土器が少量含まれる。杯C (149・150) は口径13.7~12.7cm、器高3.1~3.3cm。杯AⅡ (151) はb₁手法で口径16.7cm、器高4.4cm。甕Aには内面を削る152とヘラで撫でた153・154などがある。甕Bは扁平な把手を貼り付け、体部内面に当て具痕がある。須恵器杯Aは丸みのある分厚い底部 (158) と平底薄手などがある。杯B (156・157) はいずれも底部ヘラ切り調整。蓋 (155) は笠形をなし口縁部に身受けの小さな返りがつく。外径14.8cm。「于」の墨書がある。平瓶 (159) は体部径8.8cmで提梁がつく。平瓶 (161) は直径18.7cmで角張った肩の体部に広口の口縁部がつく。160は口縁端部下に凸帯状の段をもつ。東海地方の平瓶の口縁部と思われる。短頸壺には角張った肩に沈線を巡らせ四耳をもつ162と、やや張りのある体部で高台をもつ163などがある。

16) 土製品など 硯・土馬のほか、墨書土器、製塩土器、漆附着土器がある。

硯には一条条間路南側溝 SD6801の蹄脚硯脚部1片、同溝上の包含層などの円面硯3点のほか、須恵器杯B蓋の内面を使用した転用硯6点がある。円面硯 (fig.13) は硯面部径15.3cm、長方形透窓は19個に復元できる。包含層出土ではあるが、本来は南側溝に含まれていたのであろう。ほかにほぼ同大で透窓が22個に復元される破片がある。

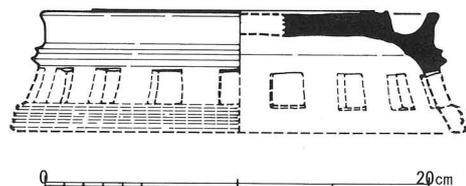


fig.13 円面硯

土馬はSE7243・7244などから体部4点、脚部4点、尾部1点が出土した (PL.11)。調整と胎土から7個体以上。いずれも長胴短脚で鞍を突帯で表現する形式で、尻繫を竹管文列で表現するものとししないもの、手綱を沈線で描いたものなどがある。平城京の奈良時代前半の溝 SD 485出土例等に比べて、胴部の反りがなく藤原宮期の土馬の特徴をもつ。

製塩土器は図示した SE8690例 (8) のほか SE8685・SE8664・SE7237など奈良時代前半まで存続した井戸から少量出土している。いずれも外面に手掌文が残り、内面はナデ調整。

漆附着土器には土師器杯A・杯C・杯G、須恵器杯Bなどを利用した漆パレットと須恵器壺・平瓶を利用した漆壺とがある。いずれも少量づつではあるが、SE8690・7244・7237など銅ス

ラグ・フィゴ羽口と重複した出土分布を示す。

墨書土器は、図示したもののほかにSK7236の須恵器杯Aがあるが、判読できない。

17) 右京一条一坊出土土器の特徴

①土師器杯A Iを例にとれば、西北坪の土坑・井戸出土土器は径高指数29~26で2段放射暗文の飛鳥IV~V期の土器が主体を占める。そのうちSE8689には抜取穴埋土上層に、SE8685には抜取穴底近くに口径20cm程度、径高指数18~19、1段放射暗文+連弧暗文の平城宮II期や径高指数17前後で1段放射暗文だけの同III期の土器が少量含まれている。西南坪の井戸、土坑の場合も同様で、SE7244に同様の時期の土器が含まれるが、内面の暗文がなくなった奈良時代後半以後の土器は認められない。両坪は飛鳥IV期に造営され、飛鳥Vの時期に改作を受けた後、平城宮II・III期に完全に廃絶する。

奈良時代の土器はこれまでに、京域では本坊に隣接する右京一条二坊や左京二条二坊、宮域東の左京六条三坊などで確認されているが、宮域では西外濠、東方官衙地区の一部などその出土は限定的である。宮・京域の大部分は遷都後程なく廃絶したと考えられるが、一部は左京六条三坊のように、役所(香山正倉)として利用されたり、本坊を含む北辺街区の一部のように、大きく性格を変えることなく、暫く存続したと思われる。

これに対して、一条条間路側溝には明確な奈良時代の土器はみられない。この点は他の条坊関連遺構の場合と同様であり、条坊側溝は藤原宮の廃絶後程なく埋め立てられたのであろう。

②土坑・井戸出土土器の器種構成では鍋・甕・竈・甗など煮炊具が目立つ。比較的出土量の多い井戸SE8690・7237・7243で算出した器種構成比は、杯皿等の供膳具：甕鍋等の煮炊具：壺等の貯蔵具が6~7：3：1となる。藤原宮東大溝SD105など宮城内中枢部では10：1：1の比率にあって供膳具が圧倒的である。煮炊具が供膳具の半分程度存在する構成が、小規模な建物で構成される宮城北辺の街区での器種構成上の特徴とみることができる。そこでは、甗・竈の破片も少量ずつ出土しており、比較的小規模な単位で煮炊きが行なわれたであろう。

③土師器杯類の内容では木葉痕を残すa手法の杯・皿類(102・104・135など)が多いことと暗文をもつ杯A・Cを模倣した杯(131・132など)の存在が注目される。前者は底部のヘラ削りを省略したもので、後者は法量は規格に合っているものの、暗文・ミガキを施さない。ともに粗雑な作りの土器である。後者は藤原宮東面北門周辺の内濠SD2300等にもみられ、必ずしも京域に限定されるわけではない。むしろ東面北門周辺は官奴司の木簡が出土するなど、現業部門をかかえた官衙の存在が想定される地域であり、本調査区周辺が銅スラグ、フィゴ羽口、漆皿など工房関連遺物の出土する地域である点で共通する性格にあると考えられる。すなわち、これら粗雑な作りの土器は都城遺跡内でも現業階層によって使われた供膳具あるいは道具と考えられ、その出土は単に京域と宮域との違いではなく、そこで行なわれた活動の内容(遺跡の性格)の違いを反映しているとみられる。

2 瓦

瓦は少量であり、井戸・土坑などから散発的に出土した。内訳は軒丸瓦1点、軒平瓦2点、熨斗瓦3点、丸瓦約12kg（約80片）、平瓦約23kg（約150片）である。

1) **軒丸瓦** 6273型式B種1点 (fig.14-1) が井戸 SE8689の井戸枠内から出土した。6273型式は内区に複弁八弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文、外縁に凸鋸齒文をめぐらす。A～D種があり、全て藤原宮所用である。B種は弁の盛り上がりが弱いが、弁端で強く反るのが特徴である。C種と酷似するが、中房がより高く、凸鋸齒文の数も64と1個少ない。外区内縁に範傷が1箇所あり、瓦当側面に範端痕が残る。瓦当裏面や丸瓦部凸面はナデ調整。瓦当裏面の一部に押圧した布目痕が残る。表面は黒く燻し焼風である。胎土に黒色粒を多く含む。高取町と御所市の高台・峰寺瓦窯産である。藤原宮では、大極殿・朝堂院地区で、6273型式B種は軒平瓦6641型式E種と組み合わせて使用されたことが判明している。ともに粘土紐桶巻き作りである。

2) **軒平瓦** 6641型式F種1点 (fig.14-2) が井戸 SE8664の掘方から、6643型式D種1点 (fig.14-3) が井戸 SE8685の井戸枠抜き取り穴から出土した。6641型式は内区に左から右に流れる偏行唐草文を配し、上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸齒文をめぐらす。A・C・E～Pの14種があり、A・C・E・F・N種が藤原宮所用である。F種はA種と似るが、支葉の巻きが強いのが特徴である。瓦当面に糸切り痕がある。顎は貼り付け削り出し段顎である。平瓦部の凸面は顎近くまでを縦方向にヘラケズリした後、横方向にナデ調整を加える。凹面は瓦当寄りを横方向にヘラケズリするが、以下に布目が残る。大和郡山市の西田中・内山瓦窯産であり、軒丸瓦6281型式Ba種との組み合わせが判明している。6641型式F種は粘土板桶巻き作りである。藤原宮では、西方官衙地区で、6641型式F種がややまとまって出土している。

6643型式は内区に右から左に流れる偏行唐草文を配し、上・下外区と脇区に珠文をめぐらす。A～E種があり、全て藤原宮所用である。B～E種は文様が酷似するが、外区の珠文数や唐草文との位置が異なる。D種は左端に範割れ痕があり、文様がずれている。粘土紐桶巻き作りで、顎は貼り付け削りだし段顎である。平瓦部の凹面は瓦当寄りを縦・斜方向にヘラケズリするが、以下は桶の模骨痕（幅約2.5cm）、布とその綴じ合わせ痕、粘土紐痕が残る。凸面は顎近くを縦方向にヘラケズリするが、以下は縦位の縄叩き目が残る。胎土に黒色粒を多く含む。高台・峰寺瓦窯産である。6643型式D種は藤原宮ではそれほど多く出土していない。

3) **熨斗瓦** 3点とも切熨斗瓦 (fig.14-4～6) で、粘土紐桶巻き作りである。凸面は縦位の縄叩きののち丁寧にナデ調整するが、凹面は不調整。幅は11～12cmが2点、17cm前後が1点。前二者には側縁を面取りするもの(4)と、しないもの(5)とがある。それぞれSE8650とSE8690から出土。後一者は両側縁を丁寧に面取りする(6)。SE8689出土。他に割熨斗瓦と思われる瓦が3点ある。

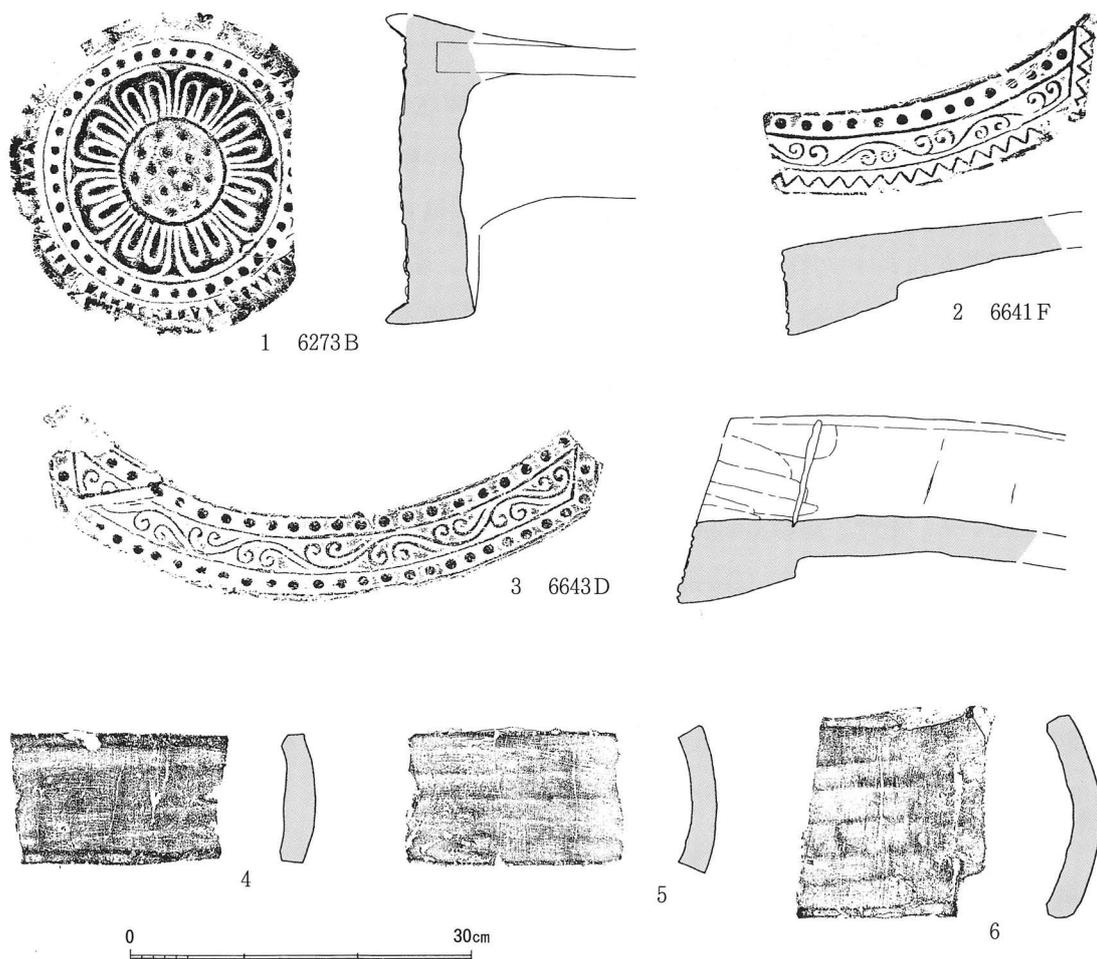


fig.14 軒瓦・熨斗瓦

4) 丸・平瓦 ほとんどが小片である。丸瓦で判明するものは全て玉縁丸瓦である。凸面に縄叩き目が残るもの、凸面に回転によるハケメ調整を施すものなどがある。後者は側面をヘラケズリし、凹面の側・端縁を面取り。胎土に黒色粒を多く含む。高台・峰寺瓦窯産であろう。

平瓦は凸面に縄叩き目の残るものが多く、粘土紐桶巻き作りとわかる例もある。他に格子叩き目平瓦が1点、凹凸面とも丁寧に横方向のナデ調整を施すものが1点ある。後者は完形品である。長さ44.9cm、広端幅32.1cm、狭端幅30.0cm、厚さ約2.3cm。側面はヘラケズリし、凹面の両側縁と広端縁に面取りを施す。比較的硬質で灰褐色を呈し、胎土に長石粒をやや多く含む。

5) 小結 今回の調査で出土した瓦は、ほとんどが藤原宮所用瓦と同じ製品であるが、量は少なく、本瓦葺き建物に用いられたとは考えられない。藤原京内では、これまでの調査において、寺院を除いて瓦がまとまって出土した例はなく、1坪占地の大規模な邸宅、たとえば右京七条一坊西南坪では、正殿や脇殿が棟だけ瓦を用いた葺棟であった可能性を考えている（『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』1987）。今回の調査地で出土した瓦の場合、熨斗瓦の数がやや目立つので、近くに葺棟の建物があつたと考えることもできよう。

3 銭貨、金属製品、木製品、その他

1) 銭貨 (PL.13) 井戸 SE8664・8665上層から和同開珎の断片が出土したため、埋土を水洗して同一破片を回収した。伴出土器などから藤原宮期の和同銭である可能性が高いが、3片に割れるなど遺存状態が悪く、銭文など細部の特徴も明確でない。外縁の幅が広い「潤縁」で、背面の方形郭が大きい「背広郭」に属する。「和」「開」「珎」の3字を確認でき、「降和」「小珎」の可能性はあるが判然としない。また「開」字の門構え上部が隸書風に開く「隸開」か否かも不明。外径2.45cm。藤原宮期の和同銭としては、藤原宮第75-15次調査出土銭を確実な資料としてあげることができる。この銭は隸開、潤縁、背広郭という特徴があり、字体は小振りで和同銀銭に類似する。また蛍光X線分析の結果、成分中にアンチモンを数%含むことが明らかになっている。近年、藤原宮期前後の銅製品の特徴として、アンチモンを顕著に含有する傾向のあることが判明しており(『奈良国立文化財研究所年報1996』)、本銭も以下に報告するように、アンチモンの含有量が高い。この事実は、第75-15次調査出土銭に共通する銭形の特徴、伴出土器の年代とも矛盾せず、本銭を藤原宮期の和同銭とする有力な傍証となろう。

銅銭の成分分析結果 蛍光X線分析の非破壊的手法によって本銅銭の成分分析を行なった。結果は次表にみるように、銅を主成分に、錫、鉛、アンチモン、ヒ素、銀、鉄、ビスマスを副次的に含有するが、注目すべきことにアンチモンの含有量が錫を上回る。アンチモンを顕著に含む銅銭としては、藤原宮第75-15次調査出土和同銭と富本銭をあげることができ、富本銭はこれまでに出土した4例のすべてに数%のアンチモンを含むことが判明している。また藤原宮80次調査出土の海獣葡萄鏡も同様であり、今後、古代金属を考える上で見落とすことができない元素の一つとしてアンチモンに着目する必要があるだろう。

銅	88.4	錫	1.5	鉛	0.2	アンチモン	3.8	ヒ素	1.3	銀	0.4	鉄	3.6	ビスマス	0.9(%)
---	------	---	-----	---	-----	-------	-----	----	-----	---	-----	---	-----	------	--------

2) 金属製品 (fig.15・16, PL.13) 鉄製品が5点出土したが原形を知りうるものは1点にすぎない。1は全長7.6cm、身幅0.5cm、厚さ0.25cm^{やすり}の鑢。全体に華奢なつくりで、断面長方形の両平面に鑢目が刻まれている。関を境に「く」の字状に屈曲するが、本来の形状であるかは不明。身は両端部でやや幅を広げ、先端は厚さを減じて尖りぎみに終わる。屈曲側の面に右下がりの斜線を重ねた単目の鑢目が、外面の一部に斜格子の複目が認められる。古代の鑢の出土例は皆無に近く、唯一、宮城県東山遺跡に出土例があるが、全長17cmを超える大型品である。本例は正倉院に伝存する小型の鑢(南倉88鑢第1号)に近く、彫金などの細工用の鑢とみられる。井戸 SE8689出土。南西坪の65次調査区では、井戸 SE7237から鉄鑢と刀子が出土している。鉄鑢2は^{のかつぎ}篋被と^{とげ}茎の界に^{まち}棘状突起をもつ^{きよく}棘篋被の鑢。左右均整に小さく刃をつけた鑿矢鑢で、実戦用の中心となる形式の鑢である。関上部に黒漆が付着し、その下に糸巻きの痕跡が

残る。全長10.4cm、莖長3.1cm。刀子3は莖を折損するが、刃部はほぼ完存。平造り角棟の最も一般的な刀子で、棟関から切先に向かって棟厚を減じる。よく使い込まれており、研ぎによって大きく身が細る。刃関は不明瞭。現長9.2cm、身長5.6cm。棟厚0.35cm。

12は65次調査区の井戸SE7237から出土した黒漆塗木柄付刀子。完形に近い刀身が木柄に装着された状態で遺存する。現状で木柄の柄元から中程で折損し、刀身と木柄が分離するが、全体の残りは極めて良い。現存長23.4cm。刀身は平造り角棟の一般的な刀子で、切先をわずかに欠失するものの鋭利な刃部が残り、刃関と棟関の造り出しも明瞭。棟は身中程から切先に向かってわずかに内湾する。身現長8.3cm、刃元の身幅0.83cm、棟厚0.38cm。莖は途中で折損し莖端を柄中に残す。X線写真による復原莖長7.2cm。

木柄は全長15.0cmで、背方向に緩やかに湾曲する。断面は背に丸みをもたせ、腹側を尖らせた卵形を呈する。柄元の断面長径1.8cm、短径1.42cm。柄元から深さ7.6cmの莖孔が削り抜かれており、柄元木口には鉄刀身を固定した幅0.5cm、厚0.1cm弱のはばき鑿が埋め込まれた状態で遺存する。全面に黒漆が塗布されているため木取りや細部の加工は不明であるが、X線写真撮影の結果、柄頭3cmほどが別材であることが判明。その材質や接合方法は判然としないが、兜金形をした柄頭材を接着剤で継いだようである（fig.16 X線写真参照）。柄長4寸で計画した木柄を製作途上で5寸に変更したものか。刀子は木工具のみならず万能の切削具として多用されたため、出土例の多い鉄製品である。しかしながら木柄に装着された状態での出土例は少なく、出土木柄も白木のものがほとんどである。黒漆塗り木柄をもつ本品は、工具とみるよりは官人が携帯した書刀とみるべきであろう。藤原宮期の刀子を知るうえで一級の資料である。

3) 木製品 (fig.15、PL.12) 井戸を中心に祭祀具や工具柄などが出土した。5から9は斎串。5は細長い薄板の両端を圭頭状につくったもので、上端の斜辺の左右から割裂くように切込みが入る。長12.9cm、幅2.1cm、厚0.3cm、SE8665出土。6と7は上端を圭頭状に、下端を剣先状につくる。切込みは7が斜辺に、6が斜辺直下に入る。7は全体に腐食が進み残りは悪い。現存長20.4cm、厚0.4cm、井戸SE8689出土。6は現存長14.5cm、幅1.5cm、厚0.25cm、井戸SE8650出土。8も井戸SE8689出土品で、切込みは側辺に入る。現存長8.2cm、幅1.2cm、厚0.4cm。9は剣先状に尖った斎串の下端部である。SE8664出土。これらの斎串は、いずれも井戸の埋土中から他の祭祀具を伴わずに出土しており、井戸の祭祀に用いられたものと推測される。4は中空の莖の外表面を縦方向に削り、外径1.2cm、長10cmの棒状品に仕上げた木柄。小口から節にかけて径0.8cm、深さ9.7cmの孔があく。井戸SE8690出土。10は井戸SE8685から出土した部材。折損のため全形は不明であるが、一木を削りだして上端に丸棒状の握り部をつくり、その直下を三角形に大きく削り抜く。欠損部を左右対称に復原すると、スコップの柄に似た把手状木製品となる。以上の他に、土坑SK8667から桶の側板、井戸SE8689から先端を尖らせた杭がまとまって出土。またSE8650・8665・8685・8690から桃の種子が出土している。

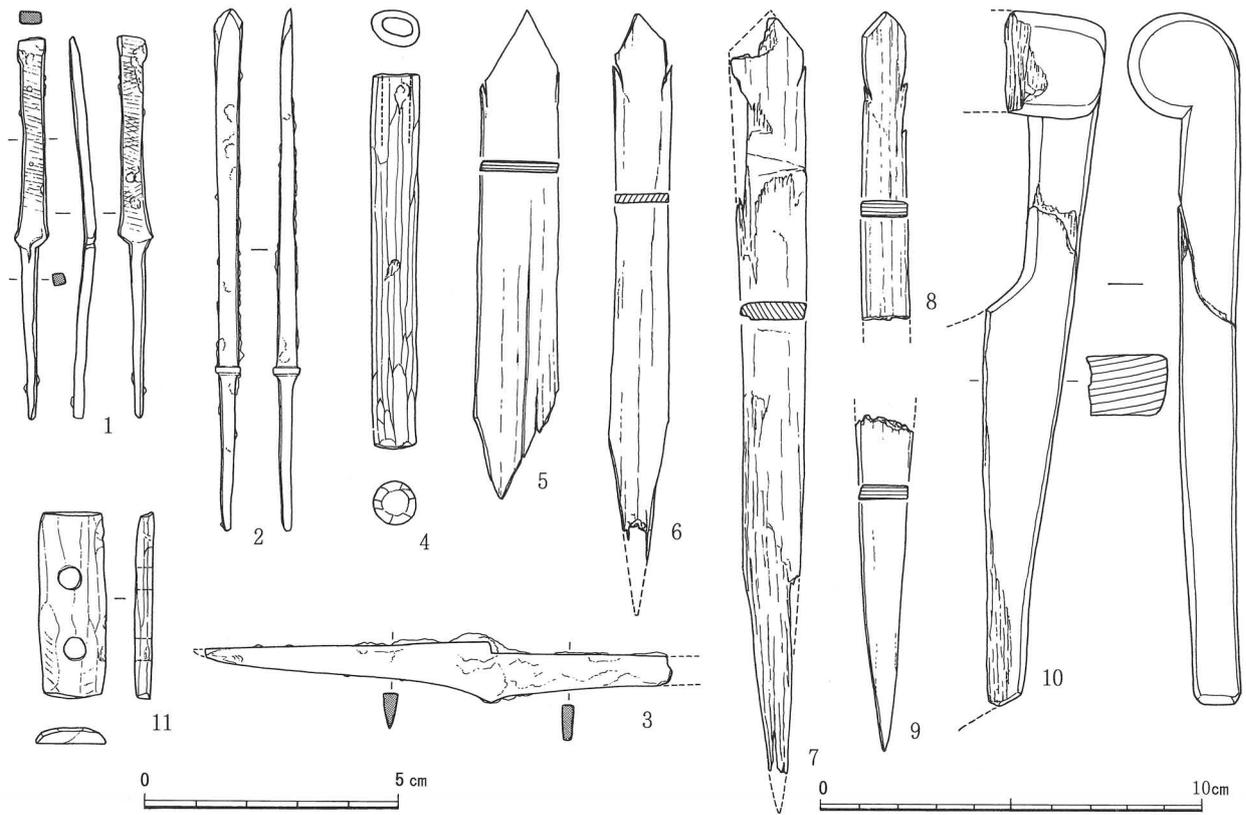


fig.15 金属製品・木製品・鹿角製品 (1~3・11: 2/3、木製品1/2)

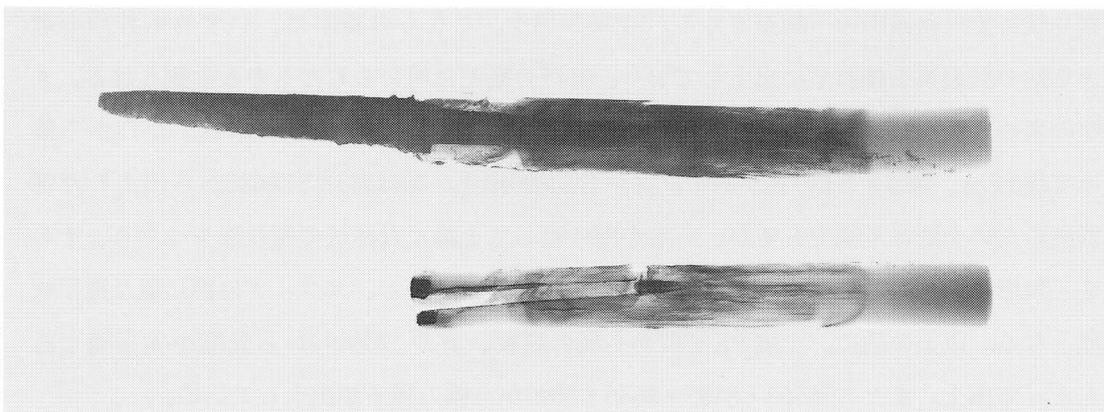
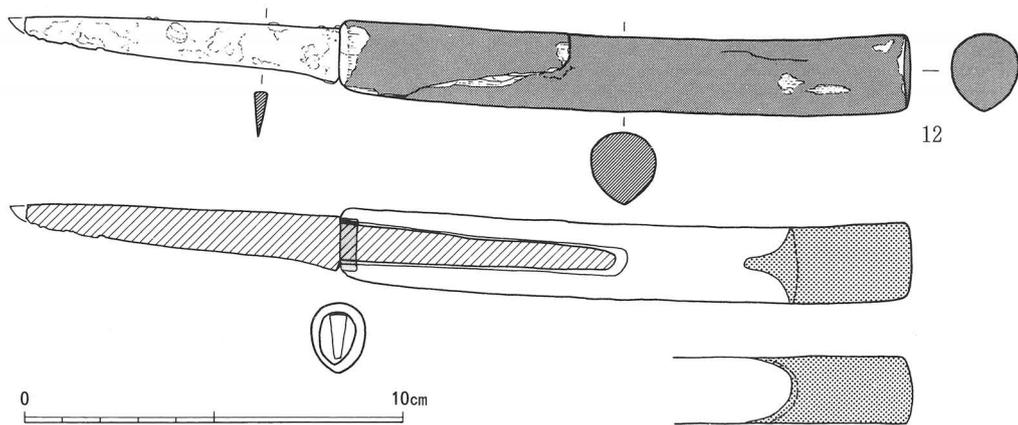


fig.16 黒漆塗木柄付刀子実測図・X線写真 (1/2)

4) 鹿角製品 (fig.15、PL.13) 11は縦3.75cm、幅1.35cmの平面矩形の鹿角製品。中軸上に径4mmの円孔が2孔あく。上面は角を落として甲盛りに、下面を平坦につくる。上面に整形時の縦方向の削り痕が残るが、研磨されて光沢をもつ。側面形は、中央部から両端に向かって厚さを減じ、小口は傾斜をつけて截られる(中央部最大厚0.4cm)。用途については詳らかではないが、正倉院に伝存する葛製胡祿^{ころく}の緒の留具に類似する。胡祿を身体に装着するための緒や、矢束ねの緒を背板に固定する座金状の部品で、対になる円孔に緒を通して背板に固定したり、緒締としている。本品の用途を推測する上で参考になろう。井戸 SE8664の枠内最下層から出土。

5) 石製品 (fig.17、PL.13) 今回の調査区に外部から意図的に搬入された石材を62点抽出できた。内45点が流理構造が顕著な耳成山産の斜長流紋岩で、表面は風化のために灰黄白色を呈し、板状節理が発達。その内の21点に、小口面を中心にした使用痕跡が認められる。この他に定形的な流紋岩系砥石や弥生時代のサヌカイト製石器などが出土している。

1は流紋岩質溶結凝灰岩(俗称榛原石)製の砥石。厚さ6cm前後の板状節理の表裏面と1側面を使用。研磨面は自然の凹凸が磨滅して平滑となり、複数方向の刃痕が認められる。井戸 SE8689出土。3は表面に1~2mm大の長石風化による空隙をもつ流紋岩系の砥石。長さ7.0cm、幅6.4cmの平面五角形をした小型の砥石で、小口を含み全面が研ぎ減る。上面は3方向に研ぎの方向を変えて使用。土坑 SK8686出土。2・4~6は井戸 SE8690から出土。2は砂岩製の不整形砥石。折損著しく本来の形状は不明。2面が大きく凹レンズ状に研ぎ減る。4は厚さ1.3cmの斜長流紋岩製の砥石片。板状節理面の1面を使用する。研磨面に筋状の擦痕が顕著に残る。5と6は擦石に近く、板状節理面の片面を使用し、大きくすり減って角が磨滅する。

7~9は、弥生時代の石器。9は剥片刃器で土坑 SK8686から出土した。不定形剥片の1辺に丁寧な両面剥離で刃をつくり出す。刃部の対辺となる背部には自然面が残る。8は平面台形の小型の刃器。刃部は下辺と両側辺に作られ、いずれも使用による磨滅が顕著。井戸 SE8665出土。60次調査では、一条条間路南側溝 SD6801から完形に近い木葉形の石槍7が出土。現長9.3cm、重量39.3gで、先端をわずかに欠損。両面から細かな二次調整を加えて鋭利な刃をつくり出す。

以上の他に井戸 SE8689から鋳型片が出土した。小片のため製作された器物は不明であるが、細密な文様の一部が残存する(PL.13参照)。鋳型片は過去の調査で、西北坪の井戸 SE6810から1点、一条条間路の北側溝から4点、南側溝から1点、南西坪のSK7240から1点出土している。これに関連する鋳造関係遺物は、60・65次調査区から鞆羽口片が19点、埴塙片が38点出土しており、付近に鋳銅関係の工房が存在したことを示唆する。これらの分布は、南西坪の全域に分布するものの、特に60次調査区の西部に集中する傾向があり、付近に工房の存在が推測される。こうした鋳造関係遺物の出土と宅地内の小規模建物のあり方は、平城京の八条、九条付近の様相と類似し、藤原京の土地利用と金属生産工房のあり方を考える上で興味深い。

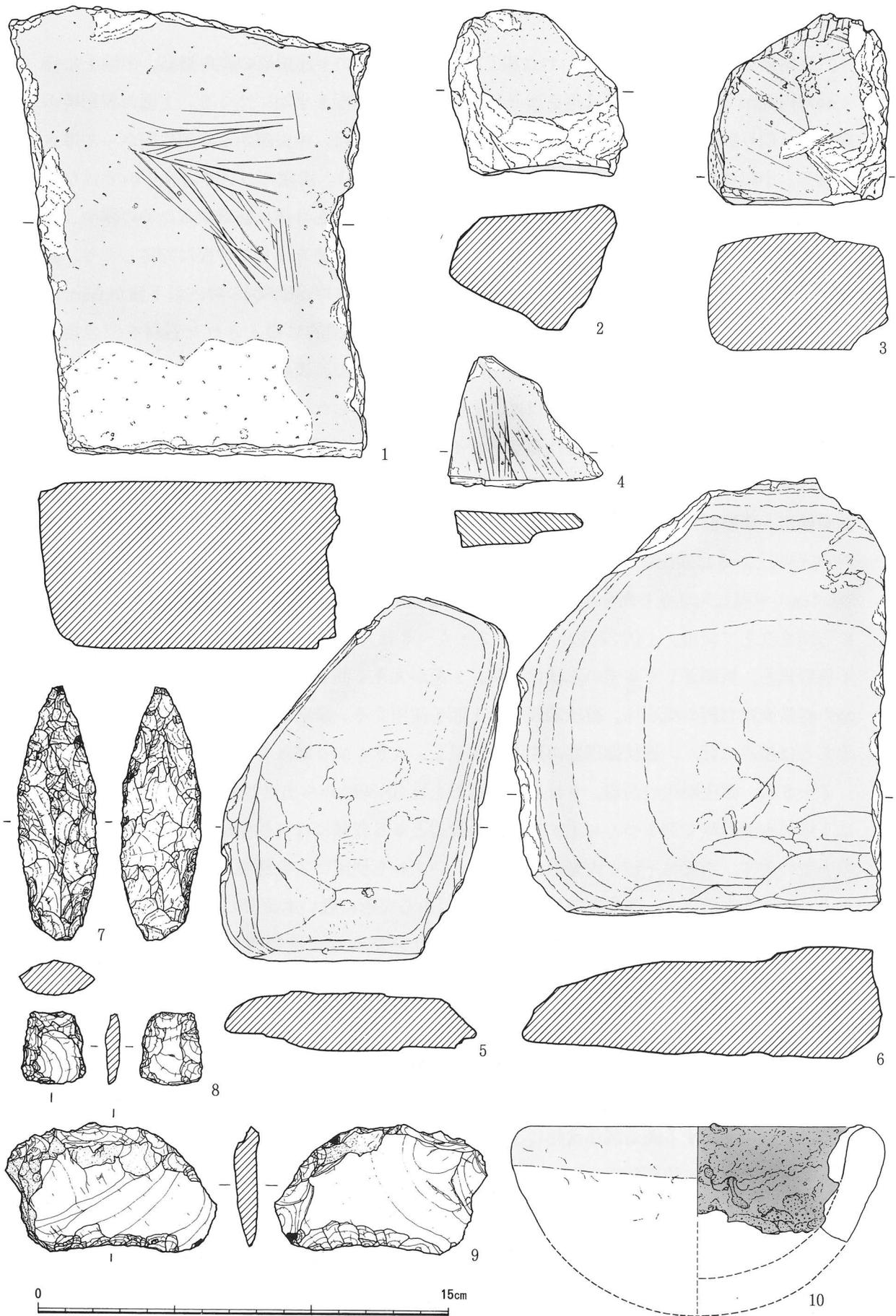


fig.17 石製品・埴埴

付 寄生虫卵分析・花粉分析

株式会社 古環境研究所

1 試料について

西区で検出した井戸 SE8685と大土坑 SK8667の堆積物について、寄生虫卵分析および花粉分析を行ない、遺構の性格と植生の復元を試みた。試料は SE8685の 1・2（上層・下層）、SK8667の 3点である。

2 寄生虫卵分析

1) 方法 微化石分析法を基本に以下のように行なった。

- (1) サンプルを採量する。
- (2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- (3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- (4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。
(2・3度混和)
- (5) 水洗後サンプルを2分する。
- (6) 片方にアセトリシス処理を施す。
- (7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- (8) 検鏡・計数を行なう。

tab. 3 寄生虫卵分析結果

分類群 (試料0.1cc中)		井戸 SE 8685		土坑
学名	和名	1	2	SK8667
Helminth eggs	寄生虫卵			
Ascaris	回虫		2	
Trichuris	鞭虫		5	
Total		計 (-)	7	(-)
		(-)	70	(-)

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行なった後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行なった。

2) 結果 SE8685の2より少量の回虫卵と鞭虫卵が検出されたが、他からは検出されなかった (tab. 3)。

3) 小結 分析の結果、寄生虫卵は少量の検出かあるいは検出されなかった。後述する花粉分析では花粉粒が良好に検出されていることから、寄生虫卵が分解されるような堆積保存環境でなかったと考えられる。これらのことからみて、SE8685とSK8667は糞便に強く汚染される堆積環境ではなかったと推定される。よって、便所遺構である蓋然性はないとみなされる。

3 花粉分析

1) 方法 花粉粒の分離抽出は、基本的には中村 (1973) を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行なった。

- (1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

tab. 4 花粉分析結果

学名	分類群 和名	井戸 SE 8685		土 坑 SK8667
		1	2	
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1		
<i>Abies</i>	モミ属	8	4	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	4	2	1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	13	12	29
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	26	23	5
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	2		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	33	36	3
<i>Juglans</i>	クルミ属			1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1		1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			121
<i>Betula</i>	カバノキ属		1	3
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ		1	1
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	11	12	10
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	4	1
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	4	5	12
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	10	32	11
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		2	6
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	2	1	4
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ			1
<i>Vitis</i>	ブドウ属			2
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属			1
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			61
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
<i>Portulaca oleracea</i>	スベリヒユ属		1	
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	13		3
Rosaceae	バラ科			5
Leguminosae	マメ科			2
Nonarboreal pollen	草本花粉			
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属			1
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1		
Gramineae	イネ科	217	117	31
<i>Oryza type</i>	イネ属型	85	6	6
Cyperaceae	カヤツリグサ科	81	83	5
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ		1	
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	1		
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節		2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	46	60	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	5	2
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	3	1	
Cruciferae	アブラナ科	10	8	
Umbelliferae	セリ科	4	6	
<i>Plantago</i>	オオバコ属	2		
Lactucoideae	タンポポ亜科	10	5	3
Asteroideae	キク亜科	12	5	3
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	23	16	2
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	13	4	3
<i>Celatopteris</i>	ミズワラビ	1		
Trilate type spore	三条溝胞子	8	9	2
Arboreal pollen	樹木花粉	116	135	274
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	13	1	10
Nonarboreal pollen	草本花粉	497	315	53
Total pollen	花粉総数	626	451	337
	(試料1cc中に算定)	18780	9922	17524
Unknown pollen	未同定花粉	3	4	4
Fern spore	シダ植物胞子	22	13	5

- (2) 水洗の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行なう。
- (3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- (4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- (5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行なう。
- (6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行ない、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行なった後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行なった。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行なった。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行なった。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

2) 結果

(1) 分類群 出現した分類群は、樹木花粉22、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉17、シダ植物孢子3形態の計46である。これらの学名と和名および粒数を tab. 4 に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、トチノキ、ブドウ属、トネリコ属、ニワトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕 スベリヒユ属、クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕 ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、セリ科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕 単条溝孢子、ミズワラビ、三条溝孢子

(2) SE8685 樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ、マツ属複雑維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリーシイ属が主に出現

する。草本花粉では栽培植物や人里植物を多く含むイネ属型を含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科がやや高率で、ヨモギ属、アブラナ科などが出現する。なお、試料1では特にイネ属型を含むイネ科が優占する。

(3) SK8667 樹木花粉の占める割合が草本花粉より極めて高い。樹木花粉ではハンノキ属、ニワトコ属－ガマズミ属が優占し、マツ属複維管束亜属もやや高率である。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が主に出現する。

3) 花粉分析から推定される植生と環境 SE8685とSK8667から得られた花粉群集は著しく特徴が異なる。示唆される植生はまったく異なり、同発掘区内であるので時期が隔たると推定される。以下、土坑ごとに植生と環境の復元を行なう。

(1) SE8685 周囲はイネ科を中心に、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属、アブラナ科など繁茂していたと推定される。これらはいずれも集落域や農耕地に生育する人里植物ないし農耕雑草の性格をもつものであり、周囲は集落や農耕地の広がる人為的な環境であったと推定される。上位（試料1）ではイネ属型の出現率が高く、水田も分布していたと推定される。樹木はイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、スギ、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガン亜属、クリシイ属などが周囲で孤立木の状態かやや遠方で森林を形成していたと考えられる。照葉樹が優占しないため、人為性の高い森林が推定される。

(2) SK8667 周囲にはハンノキ属、ニワトコ属－ガマズミ属、ニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属）の二次林性の樹木が繁茂していた。放棄地が多く途中相の樹木が多く生育していたと考えられる。

参考文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－』奈良国立文化財研究所 p. 14-15

金子清俊・谷口博一（1987）「線形動物・扁形動物・医動物学」『新版臨床検査講座』8 医歯薬出版 p. 9-55

中村 純（1973）『花粉分析』古今書院 p.82-110

金原正明（1993）「花粉分析法による古環境復元」『新版古代の日本第10巻』角川書店 p. 248-262

島倉巳三郎（1973）「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 p. 60

中村 純（1980）「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 p. 91

中村 純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として」『第四紀研究』13 p. 187-193.

中村 純（1977）「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p. 21-30